

他者とともに書くこと

——武田泰淳と武田百合子の口述筆記創作をめぐる

田村美由紀

1. 武田泰淳と武田百合子の「異質さ」

本稿は、武田泰淳と武田百合子の口述筆記創作に着目し、書くことの協働性が具体的な文学実践のなかにとどのように織り込まれているのかを考察するものである。

近年、性差別の告発やジェンダーに基づく不平等の是正といった問題への社会的関心が、これまでにない高まりをみせている。それに伴って、名声を獲得する男性芸術家や知識人の陰で、自己犠牲を強いられる妻というフェミニズムが問題視してきた夫婦間の主従関係をめぐる議論が、再び注目を集めている。二〇二〇年三月には、

インゲ・シュテファン『才女の運命——男たちの名声の陰で』^①（松永美穂訳、フィルムアート社）が刊行された。本書は『才女の運命——有名な男たちの陰で』（松永美穂訳、あむすく、一九九五年）というタイトルで出版された最初の日本語版から二五年ぶりの再版に当たるのだが、訳者の松永美穂はその経緯について、世界的に活発化した「ミートゥー（#MeToo）」運動の潮流に合致するテーマとして再び読者の関心を集めたことが、出版を後押しする契機になったと述べている。^② ゼルダ・セイヤー・フィッツジェラルドやクララ・ヴィーク・シシュマン、ミレヴァ・マリチッチ・アインシュタインなど、歴史に名を残した男性たちのパートナーであった女性たちの生涯に光を当てたこの伝記集では、「天才の犠牲になった女性たちの物

語」が掘り起こされている。こうした作業を通して、異なる地域や時代に生きた彼女たちに共通する境遇として浮かび上がってくるのが、「男性のパートナーによる女性の才能の搾取と破壊、さらに私たちの仕事に対する彼女たちの創造的・女性的な貢献を、後世の歴史評価が脇へ押しやり、排除してしまう⁴」という不可視化の構造である。彼女たちは表面的には「ミューズ」として崇められながらも、一方では家父長制的因習のもとで「内助の功」という献身的役割が期待され、男性の偉大な業績を支える忠実な伴侶として振舞うことが求められた。『才女の運命』は、妻たちが自らに課せられた性役割と、自己表現への欲求のはざまに葛藤したのかを、彼女たちの伝記的事実を辿り直し、再構成することで克明に描き出している。

たとえば、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイとその妻、ソフィア・アンドレイエヴナの夫婦関係について論じた冒頭の章では、ソフィアの日記の記述を手がかりに両者の軋轢が浮き彫りにされている。妻・ソフィアはトルストイの作品や日記の筆記者を務めるとともに、夫の財産や著作権の管理、作品出版許可の取得手続きに至るまで、創作活動の安定的な継続のため奔走した人物である。シュテファンは、妻殺しを告白する男が登場する『クロイツェル・ソナタ』（原著：Kreuzpoar sonata）（一八八九年）を校正していた当時のソフィアの日記に着目し、彼女がその作品の最初の読者になることで、

作中で暴力的に貶められる妻としての立場と、作品の出版を助ける校正者としての立場のはざままで引き裂かれていたことを指摘している⁵。では、私生活と創作活動という二重のパートナー関係にある男女が抱えるこうした問題は、日本においてどのように論じられてきたのだろうか。

秋山洋子は「作家になる以前、夫の清書をしていた」という共通の経験をもつ高橋たか子、矢川澄子、冥王まさ子という三人の女性作家を取り上げ、「文壇の寵児となつてゆく夫と清書にいそしむ妻」という構図が「精神的な従属／支配の関係」へと変質していく様を明らかにしている⁶。三人は、いずれも後に夫となる高橋和巳、澁澤龍彦、柄谷行人と同等の高等教育を受け、対等にその知性を共有できる者として出会った。しかし、結婚生活を送るなかで、身近に夫の才能を感じ、それに圧倒され傾倒することで、彼女たちは劣等感を抱え、絶対的な知の階層の前に屈従した、と秋山は指摘する⁷。夫への尊敬の念が服従へと転化したことで、妻は日常の些事をすべて引き受け、夫の創作活動に全面的に奉仕することになる。彼女たちは自ら作家として表現の方途を得ることで、この閉塞した状況を切り拓くまでのあいだ、家父長制的な夫婦関係における従順な妻の立ち位置を徹底して演じなければならなかったのである⁸。

ここで注目しておきたいのは、秋山が三人の苦悩や葛藤に対比させる形で、「こんな現象は、たとえば武田泰淳とはまったく違った

尺度で生きていた武田百合子には起こらなかつたことだろう⁹⁾と、武田泰淳と武田百合子の夫婦関係をはつきりその例外に位置づけている点である。

第一次戦後派として知られる作家・武田泰淳は、小説『富士』（一九七一年）刊行後の同年一月、糖尿病に起因する脳血栓を患った。翌月には退院したものの、右手に麻痺の障害が残り、文字が書きづらくなつた泰淳に代わつて、以後百合子が本格的に原稿の口述筆記や清書に当たるようになる¹⁰⁾。それは一九七六年一〇月五日、泰淳が胃癌と転移した肝臓癌によつて亡くなるまでの約五年間にわたつて続けられた。百合子は、敗戦後に作家の秘書や出版社勤務を転々とするなど文筆業に元々縁が深く¹¹⁾、後述するように泰淳の死後は彼女自身も随筆家として作品を発表している。

泰淳と百合子の夫婦を主人と奴隸、あるいは支配と従属の関係とは無縁だとする評価は、秋山だけに限らず、現在まで広く共有された見方である¹²⁾。たとえば樋口覚は次のような言葉で、二人の特殊性を語っている。

今では全くの死語になつたが、「夫唱婦随」という言葉がある。昭和二十二年の姦通罪の廃止に象徴されるわが国の性思想における寛容と、家族関係の崩壊からみれば、よほど異質で、むしろ太古の面影さえ帯びる大乗的な夫婦関係を保ちながら、

その奇蹟を自由無碍に成就した一組の夫婦がかつてあつた。

それは武田泰淳と武田百合子で、その邂逅から別離にいたるまで、戦前、戦後において他にみない関係、初期の武田泰淳の小説の題名からいえば、「異形」な『愛』のかたち¹³⁾として発し、独自の足跡を日本文学史に残した。

右の評言の是非は措いておくとして、なぜ二人は一般的な作家夫婦と異なり、これほどまでに肯定的な評価を獲得してきたのだろうか。まずは、こうした評価が定まるに至つた経緯とその問題点を明らかにしておきたい。

ひとつには、百合子が「武田泰淳」という有名な磁場から逃れ、自らも随筆家として独立した評価を得た稀有な存在であつたことが想起される。男性ジェンダー化した文学場において、女性作家が無視や抑圧といった様々な手口の誹謗中傷に曝されてきたことは、ジョアナ・ラスが提唱した「テクスチュアル・ハラスメント」という概念によつて類型化されている¹⁴⁾。とりわけ既に文壇で確固とした地位を築いている男性作家の妻が同じく作家として世に出た場合、妻の書き物を夫の影響や助力の産物と規定し、正当な評価の対象と見なさない批評言説は根強い¹⁵⁾。

しかしながら、一見百合子はこうした作家の妻が被つてきた不当な扱いからは無縁の場所にいるように見える。泰淳の死後に作品が

発表されたという限定はあるものの、彼女の文章に対する評価は総じて高い。泰淳と百合子いずれもの担当編集者を務めた経験のある村松友視は、「最初は武田泰淳という類稀な夫の影響と見られもしたが、やがてその個性的な天賦の才能が、真つ正面から受け止められ、詩魂をはらむ比類ない文章家としての定評を得てい」き「文章家武田百合子が独立してゆく」と、その評価の緩やかな変遷を指摘する¹⁶。換言すれば、百合子自身の文章家としての才能が、自らを夫・泰淳の呪縛から解放したとする見方である¹⁷。

泰淳と過ごした富士山荘での日々を綴った『富士日記』¹⁸（中央公論社、一九七七年）が泰淳の死後に発表・刊行されると、平易な言葉ながら物事の本質を生々しく捉えた独特の文体と、その大胆かつ細やかな生活感覚に多くの人々が魅了された。それは一般読者だけに限らず、文壇の既成作家にとつても同様であった。

たとえば、『富士日記』に帯文を寄せた埴谷雄高は「いわば生れながらの天性の無垢な芸術者として一瞬一瞬の生を生きつづけた百合子さん、その天衣無縫の芸術家を「発見」したことは、武田泰淳の成長史のなかでも殊に特筆すべき「発見」¹⁹だと賛辞を送り、島尾敏雄は「武田泰淳夫人は本来の芸術家ではなからうかと私はひそかに思っていた、その発想と感受と表現のあいだの絶妙なハーモニイが感じられたからだ。「…」今ひとまず流れをせきとめてまとめられたこの「富士日記」には、従つて無垢な表現が到る処に燃え

立っている」と、瑞々しい感性に対する感嘆を惜しまない。また中村稔は、小説『富士』の終盤に描かれた飼い犬「ポコ」が亡くなる場面の叙述が、『富士日記』における武田家の愛犬（名前も作中同様「ポコ」である）が亡くなった日の文章からの引用となっていること
に言及し、「こういう文章がただ天性の素質だけで書けるはずがない。推敲したにせよ、しなかったにせよ、自己をよほど確かに見る眼と表現する力に身についていたのだろう。そういう意味で百合子さんは天性の文学者であった²⁰」と評している。これらの評言に共通する「天性の無垢」、「天衣無縫」、「本来の芸術家」といった言葉たちは、今日においても百合子の随筆家としての才能や文章の魅力を語る際の常套句となっている。

もちろん、こうした評価の枠組みそのものに問題がないわけではない。金井美恵子は、「こうした戦後文学を代表する〈文学者〉と、その正統な後継者である〈文学者〉が、合言葉のようにいつい口にしてしまう〈天性の無垢〉や〈本来の芸術家〉、〈天衣無縫〉、〈女性的な力〉とは、いつたい何なのか。むろん、こうした言葉には、讚美であり感嘆であると同時に、どこかそれが自分たちの〈文学〉とは別の場所と異なる見方で書かれたことに対する、怖れと、それ以上の安心とでもいったようなものが存在する²¹」と、男性作家たちの言葉に内包された自己欺瞞的な態度を鋭く剔抉してみせる。

既存の価値基準や尺度で測れない表現に出会ったとき、その理由

を「生まれながらの資質」という原初性に求めることは、最も安易かつ安全な方法である。そうしたニュアンスを多分に含む「天性」や「天賦」といった言葉を多用することは、百合子を特殊な才能を持った人物として囲い込むことにも繋がるだろう。²⁴それは、アマチュアであるがゆえに素朴な魅力を備えた女性表現者の言葉を自分たちの「文学」の外部に配置し、既存の男性作家の「主流」を引き立てる「亜流」にとどまる限りにおいて承認するという、副次的な評価の一形態でしかない。²⁵

二人の関係が肯定的に捉えられるもう一つの要因は、百合子が随筆家として発表した作品や文章のなかに、夫に対する不満や苦悩を綴ったネガティブな記述がほとんど見受けられないからである。富士山荘での泰淳との生活を詳細に記録した『富士日記』を見ても、夫婦間の軋轢や葛藤は、少なくともその文章からは読み取れない。たしかに泰淳のわがままや無茶な要求に百合子が振り回されるエピソードも記されているのだが、淡々とそれを受け入れ、時にあしらひもする彼女の姿はどこか微笑ましい。²⁶それゆえ、泰淳に対する百合子の屈託のない書きぶりが、二人が対等な関係を保っていたことを裏づける証左となり得たのだろう。

しかしながら、百合子の語りが実際の夫婦関係を反映したものと素朴に受け止めることには、慎重になる必要がある。言うまでもなく、日記という形式は「書く自己」と「書かれる自己」との内的

な対話によって成り立っている。²⁷元々公表することを企図せずに日記が書かれ始めたとしても、自らを装うという意識や欲望をそこから切り離すことはできない。一見作為や衒いをまったく感じさせない百合子の日記も、それが自己表現の媒体である以上、こうした日記の潜在的な虚構性と無縁ではありえないだろう。したがって、豪胆で奔放な百合子のイメージもまた、彼女の日記の言説によって構築された虚像の一部に過ぎないのである。²⁸

なおかつ、百合子の文章に滲むある種のおおらかさは、夫の「甘え」をありのままに肯定する典型的な妻の特徴にも通じている。中尾香は、戦後の女性雑誌の言説を分析し、一九五〇年代半ばから一九六〇年代の高度経済成長長期において新たに「甘える男性」という男性イメージが登場したことを指摘している。²⁹こうした男性像は、家計の「稼ぎ手」である男性側の疲弊や消耗を強調し、弱さゆえに妻に甘える夫と、そんな夫をケアする妻という夫婦間の役割パターンを母子のメタファーで捉えることによって正当化されたと言う。

したがって、世話のかかる夫とそれを寛容に受け入れる妻という泰淳と百合子の立ち位置も、こうしたジェンダー規範によって再生産される性別役割分業からけつして自由だったわけではない。夫を肯定し受け入れる態度が、関係の対等さへと単純に結びつくわけではないのである。³⁰それは、百合子の文章に惹かれる読み手たちもまた、彼女の文章が醸し出すおおらかさや包容力に甘え、二人の夫婦

関係を過度に理想化してきたことも無関係ではないだろう。³¹⁾

このように、泰淳と百合子の夫婦関係を肯定的に捉える見方は、いずれも泰淳の死後、遡及的に導き出されたものだと言える。したがって、ここまで確認してきた通り、両者の関係性を無前提に称揚してしまうことは適切ではないだろう。では、こうした問題点を踏まえた上で、再びこの二人の関わりに焦点を当てるとするならば、どのような方法でそれを扱うべきだろうか。重要なのは、二人の関係性が望ましいものであることを論の前提とするのではなく、何がそうした関係を切り拓く鍵となっていたのか、その背景を丁寧に解きほぐしていくことである。

武田泰淳と武田百合子は、「男性芸術家とその妻」であり、創作現場における「口述者と筆者」でもあった。前者は先述の通り、ジェンダー／フェミニズムとの繋がりを、後者は作家中心主義的な創造神話の解体とテキスト生成過程の解明という問題をそれぞれ含み込んでいる。本稿ではこの二つの枠組みを「ケア」³²⁾の観点から結び合わせることで、それぞれの論点を架橋しつつ、両者の関係性を再検討してみたい。

ケアの問題を扱う従来の文学研究では、介護や育児の作中における具体的な描写や、ケアの表象と現実社会の実態との関連づけを論じることには主眼が置かれてきた。³³⁾しかし、本稿は主題論的にケアの問題を扱うのではなく、文学作品を書くという創作過程のただなか

で生じる障害（ディスアビリティ）と、それを介助するケアとして口述筆記を位置づけることで、書くことの協働性が切り拓く地平を明らかにすることを試みる。

次節以降では、泰淳の病後、百合子の筆記によって彼の執筆活動が成り立っていたことに目を向け、口述筆記で書かれた『目まいのする散歩』³⁴⁾（中央公論社、一九七六年）を分析対象に取り上げる。『目まいのする散歩』は、病後の不如意の身体に対する泰淳の意識が強く反映されており、書く行為を他者に委ねるという状況を彼自身がどのように捉えていたのかを考える上で興味深いテキストである。

テキストに示された自律した主体像への懐疑的なまなざしを、中途障害を抱える自らに対する内省として捉え、そうした依存的な自己のありようを凝視することが、他者との開かれた関係を構築する契機となっていたことを明らかにしたい。

重要なことは、泰淳と百合子の関係性が望ましいものであったとして、それを「異質さ」という言葉のうちに閉じ込めてしまわないことだろう。「異質さ」と呼ばれるものの内実を紐解き、言語化していく作業は、一方的な依存や支配の関係ではなく、非暴力的な形で相互の信頼や配慮に基づいた関係を築くための重要な指針となるはずだ。安易な同質化や普遍化は避けられるべきだが、ここでは書くことのディスアビリティに對峙した両者の姿から見えてくる問題について考えることで、倫理的な協働性を形成するための議論へと

歩を進めてみたい。

2. 歩くことと書くこと

『目まいのする散歩』は、「目まいのする散歩」「笑い男の散歩」「貯金のある散歩」「あぶない散歩」「いりみだれた散歩」「鬼姫の散歩」「船の散歩」「安全な散歩?」と題された八つの章によつて構成されている。散歩という形式をひとつの入り口として、語り手である「私」の身辺の出来事が綴られていくというのが、『目まいのする散歩』の基本的な構造である。ただし、一見「散歩」とは不釣り合いな言葉が組み合わされた各章のタイトルが、本作が単純な散歩随筆集ではないことを示唆している。現に、表題作にもなっている冒頭の「目まいのする散歩」は、泰淳の分身的存在である語り手の「私」が、病気の後遺症である目まいに不安を覚えながらも、誘われるようにふらふらと散歩に出て行く場面から始まる。

六月の午前七時、久しぶりの好天気に誘われて、山小屋を出る。医師に禁じられた酒をのむと、ついふらふらと無理がしたくなる。外出する必要は全くないのに、庭の坂を上りつめて、門の外へ出た。多少の努力感はあったが、警戒していためまいの現象は起らない。自動車道路まで行ってみようと歩きます。

まだ大丈夫である。(七頁)

しかし、目まいは突然襲ってくる。「やがて、立ち上るとめまいがきた。「やつぱり思ったとおりだ。そんなにうまくいくはずがない」と考えながら(考えるといつては、どうも意味がはっきりしすぎていて、本当は、もつとぼんやりした感じだが)しゃがみこむ(八―九頁)とあるように、「私」は目まいが生じて体勢が不安定になると、何度もしゃがみこんだり、時には地べたに仰向けになつたりして、症状が治まるのを待ちながら、なんとか来た道を引き返す。

その途中で、ガンで亡くなつた伊藤整や割腹自殺をした三島由紀夫について思いを巡らせ、自身の死に様を想像してみたりもする。けつして自由で気ままな散策などではない。偶発的に生じる目まいにまかせて移動と静止を繰り返すだけの、不安定でなんとも覚束ない足取りのひとつひとつがそこには記されている。だからこそ、「私」の散歩には妻の同行が必要になる。その後の明治神宮や武道館、代々木公園への散歩では「私も女房と同行していて、手こそ握りはしないが、形影相伴うようにして仲よさそうに歩いてゆく」(二七頁)のだ。

本作をめぐっては、百合子の筆者としての貢献度の高さに言及されることが多い。小嶋知善は「散歩シリーズの口述筆記は、百合子夫人という稀にみる筆記者がいたことで、その可能性が最大限に

生かされた小説である」と述べ、樋口覚は「これ（『目まいのする散歩』『上海の蜚』——引用者注）は良き伴侶である武田百合子を最高の筆者として得て書かれた稀有な例である」と評している。いずれも、百合子が筆者として本作に寄与した役割の大きさに注目した論評だと言えるだろう。

執筆過程における百合子の関与が読み手に可視化されやすいのは、本作が珍しく筆者を登場させることで、口述筆記によつて書かれた小説であることを自ら明かすような仕掛けを施していることも関わっている。たとえば、百合子の酒癖の悪さを暴露する記述の後には「（この原稿は、当の彼女が筆記しているくらいだから、プライベート問題は発生しないと思う。）」（二六七頁）という一文が添えられている。あるいは、別の箇所では百合子が泰淳の口述に介入し、表現を訂正させる様子——「しがみつくようにごみ箱の上にのり、何やら罵りわめいている彼女をひきずりおろし、私は、深夜の神田街を歩いて行く。彼女の髪は黒く長く垂れていたの、私は、その髪をひつつかんで歩いたような記憶がある。（私が、ひっぱつてと口述すると、彼女は、ひつつかんだのだ、といって訂正した。）」（一六八頁）——がそのまま記述されるといった具合である。³⁸

百合子は、泰淳との口述筆記の様子について、それが緊張感とは無縁の気楽な雰囲気なかでおこなわれていたことを、次のように述懐している。

みなさん口述筆記というのは、こつちがここにおいて、武田が向うにいて、おごそかにやるというふうに思われるらしくて、奥さんたいへんですねといわれたりしたけれども、ほんとうのことをいうと、あたしは脚を投げ出しちゃつて、ネコが向うからくるとかわいがつちやつたりして……。³⁹

また、「つまり、あたしはタイプライターでしょう。ところがタイプライターがだんだん凶々しくなつて、「とうちゃん、そこで景色をまぜろ」なんて言うわけ。（笑）そうすると武田も「じゃあ、景色にするか」つて……」とも語っており、泰淳の口述に介入していたのは作中の通り事実であつたようだ。⁴⁰ 百合子の言葉からは、筆者は「タイプライター」という機械化された役割に徹するべきであるという窮屈な規範を軽々と飛び越えていく風通しの良さがうかがえる。泰淳と百合子は、「するする書く」というところから、口述筆記を「するする」という略語で呼んでいたとも言う。⁴¹ もちろん実際はけつして「するする」事が運ぶような楽な作業ではなかつただろうが、こうした遊び心の感じられる言葉選びからも、二人にとつて口述筆記が、日常生活に根ざしたコミュニケーションの一部となつていたことがわかるだろう。

後藤明生はこうした口述者と筆者とのやり取り、「いわばこの作品の楽屋裏⁴²」をあえて包み隠すことなく明かす『目まいのする散

歩』に、泰淳の方法的な意識を読み取っている。

それ（口述筆記という創作形態に着目すること——引用者注）は、いわゆる楽屋裏に対する興味からではない。わたしの関心はむしろその反対に近いものであつて、作者の意図は、いわゆる楽屋裏というものをわざわざさげ出すことによつて、いかにも小説らしい調和というものを、少しばかり崩そうとしているように思うのである。わたしはそれを、いかにも同行二人の散歩にふさわしい方法だと思つた。そもそも、二人でなければ散歩出来ないということ自体、どこか崩れている。どこかズレて歪んでいる。そのズレや歪みそのものを、作者は方法化したのだと思うのである。⁽⁴³⁾

「散歩というものが、自分にとつて、容易ならざる意味をもっているな、と悟つた」（二三頁）という作中の言葉に象徴されるように、本作で繰り返し描かれる夫婦二人での散歩の様子は、百合子という筆者の協力がなければ成り立たない書く行為のメタファーとして機能しているのだ。

加えて後藤は、泰淳が口述筆記という創作形態を逆手に取ることで、「心境小説（ないし心境小説的私小説）のパロディ」を企図しているのではないかと指摘する。⁽⁴⁴⁾ 近代文学の重要な一角を占めてき

た自己を語る小説形式は、秘匿されてきた自己の内面を見つめ、それを反省的な自意識として吐露することに語りの重心が置かれてきた。『目まいのする散歩』は自己を対象化し、その心象風景を語り出していく散文的な志向については「心境小説」や「私小説」と同様の特徴を有している。ただし、読者に向けて披瀝されるべき語り手の内面や意識は、それが語り出された瞬間に、既に筆者者に対して共有されている。散歩というモチーフと自己語りが交差する小説において、自己の内部にひたすら沈潜し、孤独な内省と思索を繰り広げる一人称の語り手のあり方は、『目まいのする散歩』には見出せない。

むしろ、本作はそうした文学的伝統のなかで構築されてきた「孤独な散歩Ⅱ自己内省」という約束事⁽⁴⁵⁾を、意図的にずらすことによつて成立している。ここでは、二人でなければ歩けないⅡ書けない「私」のあり方を通して、文学場において定型化された「歩く」という行為や「書く」という行為の表象が異化されているのだ。筆者者という同伴者を得たことによつて生まれた対他的な意識は、小説としての調和や結構を揺さぶる大胆な試みへと結びついている。「小説」とも「随筆集」とも読み得るようなジャンルの曖昧さは⁽⁴⁶⁾、あえて小説の枠組みを脱臼させることで、新たな自己語りを実践しようとする泰淳の方法的意識の現れたとも言えるだろう。

「他者ととも歩くこと」と「他者ととも書くこと」がパラレ

ルに重なり合う本作の主題は、非常に明快に示されている。さらに注目しておきたいのは、病氣の後遺症に悩まされる自らの身体だけではなく、健常者の標準的とされる身体規範から逸脱するような他者に対する「私」の関心が、断片的ではあるがテキストの随所に取り扱われていることである。

散歩中に「私」の視線が捉えるのは、「たつた一人で歩行訓練をしているらしい親父さん」(二五頁)の姿や「身体障害者の児童たちが一生けんめい練習している」(二〇頁)様子である。「私」は注意深く彼ら彼女らの様子を観察するが、それが共感や理解の姿勢に貫かれたものではないことは、「大へんだな。よくも我慢しているな」と同情はしたけれども、私は彼らのようになりたくなかった。半恍惚の文士という現在の境遇が好きというわけではないけれども、彼らの境遇にくらいれば、私にはふさわしいし、どうしても死ぬまで彼らと同じ障害におちいりたくなかった」(二二頁)という語りからも明らかである。

「私」の視線に差別的な感情が入り混じっていることは疑い得ない。しかしここでは、「私」のまなざしがそうした老人や障害児たちの姿を確実に捉えているということ、「私」を取り囲む風景からその姿が排除されることなく書き込まれているということに目を向けたい。叙述の細部に滲む「私」の差別意識を断罪することはたやすい。だが「私」の語りが、彼ら彼女らの姿を不在化させていない

という事実から何かを読み取ることはできないだろうか。

老いた身体や病んだ身体を抱える者たちに対する「私」の意識は、他者に頼らなければ歩くことや書くことを実行できない自らの境遇を自覚するところに萌したものであろう。そうした自己認識は、同じく自律した主体とは言えない他者の姿を敏感に察知することを可能にする。社会的に周縁化された者であったとしても、「私」の視界から彼ら彼女らの姿が消えることはないのである。

それは冒頭の章だけに限らない。「あぶない散歩」の章では、娘・花の誕生が題材として取り上げられている。ここでは、否応なしにケアを必要とする赤ん坊の姿を通して「人間は絶えず他人にいやがられる危険を冒さねばならぬ」(一一〇頁)というある種の悟りが示されている。病後のままならない身体への気づきを経て、「私」は子の誕生という過ぎ去った出来事のなかに、たとえ摩擦を引き起こしたとしても他者と依存し合うことから逃れられない人間の生のありようを改めて見出してゆくのだ。目まいの後遺症という中途障害を負った「私」のまなざしは、脆弱性や依存性を基層とする人間の根本的なあり方を確かに探り当てているのである。

3. 自律的な主体像を疑う

ままならない身体を抱える「私」の意識は、自律的な主体概念に

対する懐疑へと接続されている。こうした気づきの端緒となるのは、やはり病後の肉体的な変化がもたらす不如意の感覚である。

他人に似せて自分の顔かたちを変えるという趣味は全くなかった。第一、入れ歯をはめた私の顔の表情は、自分の思い通りにならぬほど、こわばっているはずだった。発病以来、たしかに自分が別個の自分になったような気がする。めまいなど続いている間に、自分が意識しないうちに変身してしまったにちがいない。だから他人がどう断定しようと、それに反抗しようとしても、反抗それ自体が一種の半恍惚状態のあらわれであるから、変身そのものが捉えどころのないものであるにちがいない。

(二六頁)

脳血栓の後遺症を患う「私」にとつて、身体は自己に帰属しているながら、自在にコントロールしたり、管理したりすることが可能なものではない。「自分の思い通りにならぬほど」「自分が意識しないうちに」といった叙述は、自意識を超えて変容する身体の制御不可能性を強く印象づけるものとなっている。

しかし、自己の身体に対する不如意の感覚は、病後の「私」が置かれた状況に限ったものではない。興味深いのは、身体がコントロール不能な状態へと陥る瞬間は誰にでも起こり得ることであり、

それが日常生活のなかで突如訪れるものとして捉えられていることだ。作中には「私」の「女房」の酒豪ぶりを描いた場面が度々登場するのだが、その様子は「意識不明と思われる彼女が、いきなり起き上ると「やい、親切ぶるない」と、はつきりいった。それからまた、意識不明になる。また、異常なまでに意識明確になり、悪口を吐きつづけた」(一六三頁)と語られている。泥酔した彼女の意識はとりとめなく移ろっており、意識と無意識の境界は判然としない。

また、「いりみだれた散歩」の章には、引越し先の高井戸のアパートで親しくなった近所の「奥さん」と「女房」が部屋で談笑していたときに、ガスストーブで一酸化炭素中毒になったエピソードが記されている。朦朧とする「女房」の姿を目の当たりにした「私」は、「このようにして、人間は、自分の身に迫った危険を、危険と知らない間に、意識不明になってしまうことがあるらしい」(二四一頁)と思に至る。本人ですら気がつかぬうちに、自分の身体や意識は既に制御不可能な状態に置かれ、時に死が隣り合わせにまで迫っている。それはけつして特殊な状況ではなく、人間の生に纏われた普遍的な危うさであることを「私」は感じ取っているのである。

こうした不安定で混沌とした意識のありようは、「私」自身の錯綜した叙述とも地続きの性質を帯びている。「また話がとんでR酒

房のことになる。(何しろ、脳血栓のため、突然、ぼんやりしたり、はつきりしたりするのであるから。)(一六九頁) という釈明にも現れているように、泥酔し前後不覚となつた妻と「私」の病状とを類似したレトリックを用いて記すことで、病の有無に関わらず不如意な身体感覚が露わになる可能性のあることが示唆されていると言えるだろう。

自己の制御不可能性が曝け出されるという事態が、物理的な身体所作のレベルにとどまらないことは、以下の叙述から看取することができる。

その歩道橋から少し離れた電柱に、三島由紀夫氏の顔写真のあるビラが貼られてあつた。いかにも若々しい顔写真は、ぐつと眼をむいて明らかに何事かを訴えようとしているかの如くであつた。数枚あるビラの一つは、はがれて裏返しになつている。排気ガスの風はそのビラに吹きつけていて、前夜の雨の降りそそいだあともあつた。通行人は誰もそのビラを見ようとはしなかつた。「…」だが、三島氏の顔写真のあるビラが、三島氏以外の人の意志によつて貼られ、風に吹きちぎられそうになつてゐることは、私をおびやかした。(三〇一―三二頁)

電柱に貼られた三島のビラが喚起する、意志の存在の不確かさ。

自由意志を前提とした主体のあり方が決して自明ではなく、それが常に自らの掌中を逃れ出ていくような心許ないものであることへの「私」の戸惑いや恐れといったものが、この叙述には滲んでいる。自らの思い通りに行為することができない不如意の感覚は、「私」が自身の病の経験を通して獲得したものであり、自由意志の行使を前提とした近代的な主体のあり方を解体する可能性にも触れ得るものなのである。

意志と主体との関係に敏感な「私」の認識の射程を明らかにするために、ここで中動態の概念イメージの構築を試みた國分功一郎の議論を参照してみたい。國分は、これまで近代的主体の前提とされてきた能動性と受動性の境界を取り巻く種々の概念(意志、責任、行為、選択など)の再検討を試み、そうした二分法を超える生のあり方を、現代において忘れられた中動態という文法様式に探っている。古代ギリシア語の文法書からはじまり、バンヴェニストやアレント、スピノザなど多くの言語学者や哲学者の仕事を参照して國分が示すのは、自由意志に基づく行動とその結果に対する責任という因果関係の疑わしさと、すべてを能動／受動のいずれかに峻別しようとする固定観念を相対化する視点である。中動態とは、そうした「する」(能動)「される」(受動)の区別では説明しきれない非自発的な同意による行為を包摂するものであり、能動／受動の二分法に規定された世界の外側へと思考を押し広げるための概念なのだ。

國分の『中動態の世界』が医学書院のシリーズ（ケアをひらく）の一冊として刊行され、アルコールや薬物の依存症者との対話をプロローグとして書き起こされていることからわかるように、この本では中動態の概念規定を通して、依存症の治療やケアの現場でしばしば問題となる「する」「される」の関係性の再考を促すことが企図されている。「意志」や「責任」といった用語がすんなりと適用できない場合や、そうした言葉が逆に当事者を縛り、抑圧してしまう事態を解消するための方法がここでは模索されているのである。したがって、脆弱で依存的な主体のあり方に焦点が当てられている『目まいのする散歩』に、中動態の概念を重ねてみることは、「私」の身体感覚を読み解く上でも有効だろう。⁽⁴⁸⁾

その意味で、テキストの冒頭に置かれた「目まいのする散歩」の章はきわめて象徴的である。「私」は散歩の途中にしゃがみこんだり、寝転んだりして目まいをやり過ぎますが、それは決して自由意志に基づいて選択した行為（能動）と言い切れるものではない。身体の不調に対応するために仕方なく散歩の中断を余儀なくされるのであり、その点において、「私」は相当に受動的だとも言える。そうすることを主体的に選択したわけではないにもかかわらず、そうせざるを得ないという非自発的な行為の積み重ねによって成り立っている「私」の散歩は、中動態的な身体のあるやうが如実に反映されているのだ。

ただし、こうした意志の不確かさや身体の制御不可能性への捉え方は、単に消極的なものではない。たしかに、それは不安や焦りを生じさせる。しかし、「会話の続行や中断を、自分の意志できめかねる病人であることに満足することにしよう」（九一頁）という言葉が示すように、「私」は自由意志や自発的選択から隔たった自己のあり方を肯定的に受け止めている。能動性が主体の自由を保障するものであり、受動性が主体に何らかの行為を強制するものであるとするならば、常に主体はそれほどまで宙吊りになっている。國分は「完全に自由になれないということ、完全に強制された状態にも陥らないということ」だと指摘し、そこにこそ中動態の世界を生きることの今日的意義を見出している。⁽⁴⁹⁾

この指摘と呼応するように、『目まいのする散歩』は「地球上には、安全を保証された散歩など、どこにもない。ただ、安全そうな場所へ、安全らしき場所からふらふらと足を運ぶにすぎない」（二七一頁）という、自らの意志や選択に絶対的な信が置けない状態のなかで、自由と強制のあいだを彷徨う主体の本質を鋭く突く言葉で結ばれている。不確実性に身を委ねることを否定するのではなく、能動と受動、自由と強制の関係を組み替えていくようなある種の希望がそこには託されているとも言えるだろう。

もちろん、作中でこうした「私」の感覚が、中動態的なものとして直接明示されているわけではない。しかしながら、能動と受動の

あいだを漂う感覚は確かに「私」のなかで見出され、テキスト全体に底流している。この点を踏まえた上で、次節ではそうした身体や意識のあり方に絡んだ形で浮上してくる書く行為の協働性を、口述筆記という方法に立ち戻って考えてみたい。

4. 「書かせる」でもなく、「書かされる」でもなく

前述の通り、本作は筆者の存在を明示する表現を差し挟むことで、口述筆記で書かれたことを意図的に読み手に知らせようとするテキストである。しかし、次第にそうした直接的な表現に代わって、文体そのもののなかに筆者という他者の存在が溶け込んでくるようになる。作品後半へと進むにしたがつて、その傾向はとりわけ色濃くなつてゆくようだ。

一九六九年六月一〇日、泰淳と百合子は、友人の竹内好らとともにハバロフスク号に乗り込み、当時のソ連へと出発した。まず横浜から船でハバロフスクへ渡り、シベリア鉄道で中央アジアのイルクーツク、アルマ・アタ、途中空路も利用しながらレニングラード、モスクワを経由し、最後はストックホルムにまで至る長旅である。「船の散歩」と「安全な散歩？」という『目まいのする散歩』に収められた末尾の二篇は、このロシア旅行について取り上げた章である。「船の散歩」の冒頭には「これは、女房の旅行日記を使用してい

るので、実はつきりしているようであるが、当時の私も、現在の私も、記憶はもうろうとしている。」(一九四頁)という注意書きが添えられている。この一文から明らかのように、この二篇は百合子の日記の文章を参照、あるいはそのまま引用している箇所が記述の大部分を占める。⁽⁵⁰⁾

ロシア旅行中に百合子が日記をつけるようになったきっかけは、「つれて行ってやるんだからな。日記をつけるのだぞ」という泰淳の一言だったと⁽⁵¹⁾言う。そうして旅のあいだに書き溜めた走り書をもとに、百合子は一九七八年二月号から一二月号まで雑誌『海』にロシア旅行記を連載、それが後に単行本『犬が星見た——ロシア旅行』(中央公論社、一九七九年)として刊行された。泰淳が執筆時に参照した百合子の日記は、まだ原稿としてまとめられる前の走り書(草稿)だが、その現物を確認することはできないため、現在『目まいのする散歩』の本文と日記の照応関係を探る手がかりは、発表された『犬が星見た』以外⁽⁵²⁾にない。走り書が原稿の形に整えられる際に、百合子が手を入れた可能性も多分にあるのだが、両者の比較によつて日記の表現がどのように本作に取り入れられているのか、その輪郭をある程度浮かび上がらせることはできるだろう。

少々長い引用になるが、そうした比較の一例として以下に二つのテキストを並置してみたい。最初が『犬が星見た』の、次が『目まいのする散歩』の本文である。一見して明らかのように、出来事の

内容や事実関係だけでなく、細部の表現に至るまで、百合子の日記の記述が泰淳のテクストに転用されていることがわかるだろう。

甲板には冷たい風が吹いていて、もう人影はない。風の入らない硝子ばりの甲板の方で、三人、デッキチェアで本を読んでいる。レインコートをひっかけた女が男と手を組んで、一組ずつ、ゆつくりと歩いている。囁き合っている。五十位にみえる、ずんぐりした小柄な、労働者風の身なりの白人の男が、太った奥さん（日本人らしい）と、洗いざらしの赤いシャツを着た小さい男の子を連れて、ゆつくり歩いている。口をきかない。奥さんは質素なプリント木綿のワンピースの上に、敗戦直後の頃のような古い型の赤いオーバーコートを着ている。男の子は「サブイねえ」と言った。夫婦はそれにも返事しない。

十時半、ねる。

真暗な海に、小さい船が一隻、遠くに浮いている。三つ灯をつけて揺れている。さびしいというのか。いい感じというのか。何とっていいのか。⁵⁵

甲板には、次第に人影が少なくなり、それでもデッキチェアには、本を読んでいる人がいる。レインコートを着けた女が男とカップルで歩いてくる。五十前後のずんぐりした労働者

風の男と肥った奥さんも歩いている。奥さんは粗末なプリント木綿のワンピースの上に終戦直後のような型の赤いオーバー羽織り、赤い洗いざらしのワイシャツを着た小さな男の子をつけている。男の子は「サブイねえ」と言う。日本人だか西洋人だか、何れもはつきりしない。海は暗くなる。いい感じであるが淋しい。淋しいけれどもいい感じで彼女は眠った。（一九九頁）

『目まいのする散歩』は、基本的に「私」という一人称の語り手に焦点化されているが、百合子の日記の借用という方法によって、その語りにも揺らぎが見え始める。たとえば「宝石のようなところ」と、彼女は感じた」（二六三頁）や「まばたき一つしても惜しい」と、彼女は思った」（二六〇頁）のように、百合子の日記では「私」という一人称の主語で綴られていた心情が、三人称の「彼女」に書き換える形で引き写されている。それによって、一人称の語りに、他者の内面を断定的に語る三人称の語りが混ざり合うという奇妙な文体が出来上がっている。

あるいは、「私」がその場にいなかった場面の出来事が詳細に記されるといふ視点の複数化や移動が生じることもある。⁵⁶「今日は晴れてはいない。霧がかかっている」と、彼女より二時間ほど早く起きていた彼女の主人は言う」（一九九頁）という叙述に見られるよ

うな、「私」が自分自身のことをあたかも客体（彼女の主人）であるかのようにまなざす距離のとり方も特徴的である。これらはいずれも、百合子の日記の記述を自身の文章のなかに組み込むことによつて生じた語りの変化だと言えるだろう。

こうした文章が生成されていく過程を分節化してみれば、それは単純に泰淳の口述を百合子が筆記するという一方通行の作業として説明できるものではない。まず百合子が書いた日記があり、その内容を泰淳が読み、必要な部分を抜粋しながら読み上げ、泰淳の声で読み上げられた文章を、日記の元々の書き手であつた百合子本人が再び筆記するという複雑な作業がここではおこなわれている。このとき言葉は、口述者（泰淳）から筆記者（百合子）へと一方的に受け渡されるものではなく、百合子から泰淳へ、そして再び百合子へと繋がる円環のなかで、両者のあいだを巡るものとしてある。当然それは泰淳による百合子の書いた言葉の篡奪や属領化といった図式とはその性質を異にしている。書き、読み、読み上げ、再び書くという循環する構造のなかで、百合子の言葉が泰淳の文体に混交し、一人称の語り手の視点には収斂し得ない他者の存在を内部に含み込んだ文章が生成されるのである。

口述筆記は単に創作形態としての協働性を示すのみならず、語りの協働性をも呼び込む役割を果たしている。その意味で、泰淳が能動的な「書かせる主体」で、百合子が受動的な「書かされる客体」

であるという二項対立的な見方はもはや無効であろう。そうした固定化した役割分担では捉えきれない泰淳と百合子の口述筆記は、前節で確認した能動と受動のはざまで宙吊りとなる中動態の様相とも近似している。

たしかに、百合子の日記の内容を吟味し、文章を取捨選択し、自身のテキストに取り込んでいくという点では、それは泰淳という書き手によつて統制されているようにも思われる。しかし、そうした作業がすべて泰淳自らの自由意志の結果だと言い切ることはできない。百合子の日記がロシア旅行の曖昧な記憶を補完する装置になっている以上、泰淳は彼女に「書かせ」つつ「書かされている」のだとも言える。百合子の日記の表現を引用したことで生じる語りの違和や不整合を繕わず、あえてそのままに保持する文体は、語る主体の流動的な意識や視点を強く前景化させている。それは、能動と受動の二分法では切り分けられない書く行為の複雑性を孕みつつ、「する」と「される」のあいだを漂いながら書くというありようだと言えるのではないだろうか。

こうした書く行為の特徴を寓意するのが、「私」が高校時代に静岡県岡田方郡の内海で古い和船を漕いだ経験と、現在の船の旅とが結びつけられる場面である。「私」は和船に乗った感覚を回想しながら「浮かんでいる、流されている、漕いでいる、風景が変わってくる、いずれどこかで引き返さねばならない。頼りないような、たのもし

いような気分が、自分が何か新しい人間に生れ変わることができる瞬間に立ち会っているようで、かけがえのないスリルを味わう」（二二二頁）と述べる。予め定まった目的地を目指すのではない、予測不能な波の流れに身を任せることへの恐れと、それ以上の快さといったものがここからは読み取れる。しかし一方で、このときの「私」は、その船を「たつた一人で漕いで行く方が面白い」（二二二頁）とも語っており、他者の干渉を避けようとする意識も垣間見える。

その後、「私」はこの和船を漕いだ思い出深い田方郡の内海に「女房」を連れて行き、今では夫婦揃って観光用のソ連船に揺られる。「ここまで運ばれてきた」（二二二頁）という感慨に浸る。「私」の船と海にまつわる回想は、高校時代の経験を出発点として、現在のロシア旅行の船上へと繋がっていくのだが、それは「たつた一人で」船を漕いでいた「私」が、「女房」という他者とともに一人では辿り着けなかった遠い海へと「運ばれてきた」、その変化の過程を内包する叙述でもある。それは、百合子と自らの言葉が接触する空間を漂うことで、偶発的に言葉が紡ぎ出され、思いもよらぬ文章が生成されていくような、泰淳と百合子の口述筆記の本質を捉えた比喩として読むこともできるだろう。その意味において、『目まいのする散歩』は、まさに「他者とともに書く」という書く行為の協働性を実践的に示したテキストなのである。

加えて指摘しておきたいのは、「私」が「他者とともに書く」という方法を経由することで、書く行為に対する自己批判的なまなざしを自らの内部に折り返しているという点である。「船の散歩」の末尾では、日本陸軍二等兵として日中戦争に加わった当時、「兵隊だった私」（二二九頁）が書いた「船の散歩」の記録⁵⁵が引用されている。進軍の様子やそこで見た風景を一人称で語るこの記録を、語りの現在の「私」は「自分一人で詩的になつているつもり、傍観者ぶつた、わがままな詩情」と切り捨て、「感覚を鋭くして、書きつつつている自分が、どんな眼で注目されているかも、まったく気づいてはいないのだ」（二二二―二二三頁）と鋭く批判する。ここから垣間見えるのは、過去の自分を批評する語り手の「私」が、当時の自分に欠けていた書く自己を客観視するまなざしを、語りの現在において獲得しているという事実である。

そうした変化をもたらしたのは、やはり、つねに自分の言葉を聞き取る他者が傍にいる口述筆記の経験だったのではないか。口述者は自らの声を通して筆者に文章を書かせるが、それは同時に、筆者が最初の読者として自らの発した言葉を読んでいるということの意味する。筆者がその言葉をどのように受けとめ、筆記しているのかという内心が明らかにされることは少ない（むしろ、ほとんどの場合それは口述者の与り知らぬままである）。しかし、口述者の言葉は、筆者の批評的な視線に曝される可能性を常に潜在させてい

る。こうした点に自覚的になることによつて、語る現在の「私」は、他者を顧みることなく「自分一人で詩的になつていゝつもり」の過去の自己を厳しく否定し、「征服されようとしている大陸の住民たち、農民や職人や兵士たちの苦しい感情とは、どれほど、へだたつていたことだろうか」（二二二―二二三頁）と、かつて自らの言葉が暴力的に排除していた他者の存在を、遅まきながらその自己批判の言葉のうちに呼び戻している。

書く自己と言葉との往還のなかに自閉するのではなく、その言葉を聞き、書き、読む人がいるという当たり前の事実を忘却することなく、自己の発する言葉を他者に開かれたものとして捉えること。

『目まいのする散歩』というテキストは、口述筆記という方法を介した筆者との協働的な営みを通して、他者と自己のあいだに築かれる書く行為と読む行為の倫理性にも触れうる視点を提示しているのである。

5. 他者性と依存性

ただし注意しなければならないことは、そうした「他者とともに書く」というあり方を、泰淳と百合子の同一化と単純に言い換えることはできないという点である。両者は完全に一体化しているわけでも、一体となることが理想化されているわけでもない。「一つ家

に寝起きし、同じものを食べ、身のまわりの世話をしたからといって、口述筆記など手伝つたからといって、ものを書く人との間には千里のへだたりがある」という百合子の残した言葉からは、書くことを生業としてきた泰淳との埋めがたい距離の意識がうかがえる⁵⁷。その「へだたり」は、口述筆記を通して夫の小説制作の現場に直に触れることで、逆に浮き彫りとなつたものでもあるだろう。「ものを書く人」であつた泰淳の生活に公私の両面において深く関与しつつも、夫との同一化を期待せずその差異を受け入れること、同じ土俵に立つことを初めから志向しないことが、百合子の意識の根底を形作つていたようである。

最後に、両者が互いの差異を見失わずに関係を構築していたことの意味を、泰淳が百合子をしばしば「犬」に喩えていることを手がかりとして考えてみたい。百合子のロシア旅行記『犬が星見た』のタイトルは、仕事部屋の掃除をしながら、ものめずらしげに本を覗いている百合子を、泰淳が「やい、ポチ。わかるか。神妙な顔だなあ」とおかしがつたことに由来しており、旅行の道中でも、繰り返して泰淳は「百合子は犬だよ。どこへ行つても、臆面もなく、ワン、なんていつてるんだ⁵⁸」と呼びかける。百合子はその呼びかけを積極的に引き受け、自身を犬に擬えながら「まことに犬が星見た旅であつた。楽しかつた。糸が切れて漂うごとく遊び戯れながら旅をした」と「あとがき」に記している⁵⁹。

「犬」という言葉が相手に対する蔑称として用いられてきた歴史に鑑みれば、この呼びかけ自体に、百合子を自らに従属する存在と蔑む泰淳の無自覚な暴力性が露呈していると見る向きもあるかもしれない。しかし、「犬」が蔑称として機能してきたのは、その背後に、犬を人間に比べて程度や価値の劣った種と見なしてきた人間中心主義的な思想が存在していたからではないだろうか。他の動物に対して人間を圧倒的優位に位置づけるこの思想から距離を置いてみれば、「犬」は侮蔑の象徴となる下等な種ではなく、人間とは異なる根源的な他者性を孕んだ存在であることが浮き彫りになる。⁶¹したがって、ここでは「犬」という呼びかけに、泰淳のからかいを含んだユーモアや妻への慈しみの気持ちと同時に、徹底した他者性を備えた相手として百合子と向き合おうとする意志を読み取ってみたい。

人間と犬との関係を「重要な他者性」を帯びた伴侶種 (companion species) として定義したダナ・ハラウェイは、そうした異種間の信頼関係を念頭に置きつつ、「倫理的な係わりあいは、おしなべて〈関係しあう他者性 (otherness-in-relation)〉への持続的な注意深さという、絹糸ほどの強度の糸から編み出されて」おり、「わたしたちはひとつではないのだから、なんとか一緒にやっついていくことに存在 (being) がかかっている」と述べる。⁶²それは、一体化という幻想のもとで、自らの利益や快樂のために相手の主体性を収奪し、その尊

厳を侵し合うような関係とは異なる共生のあり方である。ここでは「具体的な差異において、相互に著しく他者である」ことを認めた上で、関係を紡いでいくことの倫理性が問われているのだ。

無論、ハラウェイの議論は人間と犬という生物学的な種を異にする両者の関係を射程に収めるものであり、種として同一のカテゴリに属する泰淳と百合子に、その議論をそのまま応用することは適切ではないだろう。ただし、伴侶種概念を通して提起される「重要な他者性」というハラウェイの思想的基盤に着目するならば、人と犬に互いを擬える泰淳と百合子の関係は、他者が他者であることを尊重する伴侶種としての繋がりを想起させる。ここでは他者と一体化ではなく、互いの他者性を認め合う距離に踏みとどまることと両者の協働性を切り拓く重要な鍵となっていたことを確認しておきたい。本稿の冒頭で引用した秋山洋子の「武田泰淳とはまったく違った尺度で生きていた武田百合子」という言葉の内実を紐解けば、こうした互いの他者性を認め、そこに共生の可能性を見出した二人の距離感が見えてくるのではないだろうか。

中途障害を抱えた泰淳と、「犬」という呼びかけを引き受けた百合子。両者に共通するのは、自らが依存的存在であることを認め、相手もまた依存的存在であることを受け入れたことだろう。⁶³人間は誰しも、他者に依存することなしに生命を存続させることはできない。にもかかわらず、普遍や権利を重視する近代のリベラルな市

民社会において、長らくそれは否定的に捉えられてきた。ケア研究がおこなったのは、「自律的個人」という主体概念を批判的に再検討し、依存関係を排除・隠蔽することで成り立っている社会構造の矛盾を明るみに出すことである⁽⁶⁶⁾。こうした視点に立つとき、依存することは主体の自律性の欠如を決定づけるネガティブな振る舞いではなく、人間関係の不可欠な構成要素として捉え返されるだろう。

泰淳が一人では書けないこと、一人では歩けないことを通して、依存的な自己のありようを凝視していることは『目まいのする散歩』の分析から明らかにした通りだが、『富士日記』や『犬が星見た』の元になる日記の執筆をめぐる、「ながいことタダで食べさせてもらってるもの。それじゃ、日記ぐらいつけてみようか⁽⁶⁷⁾」「日頃、タダで御飯を食べているばかりの私は恐縮して、旅のあいだ、走り書をしていた⁽⁶⁸⁾」と語る百合子の言葉からは何が読み取れるだろうか。

経済的に自立しているか否かを公的領域における市民資格の条件とみなしてきた社会において、女性は長らく依存的な存在として貶められてきた⁽⁶⁹⁾。しかし、ケア研究の議論を踏まえた上で、改めて百合子の立場を「依存」と捉えるのならば、彼女の言葉は、依存的な自己に対する後ろめたさではなく、ケアし、ケアされる関係を当然のものとして受け止める、銜のない自己肯定の姿勢に貫かれていると言えるだろう。食べさせてもらうこと、すなわち泰淳に依存す

ることの酬いとして百合子は書く行為に向かう。自分の書いた日記が泰淳の創作活動の助けとなることを百合子が想定していたかどうかは定かでないが⁽⁷⁰⁾、それは後に泰淳の書く行為が百合子の日記に基づく形で成り立っていくという、またひとつの依存的な関係を生み出す土壌を用意することとなったのである。

互いの他者性を損なわないこと、そして自らの依存性を否定しないことが、二人の互助的な関わりに結びついていたことは確かだろう。そこにこそ、二人が見出した望ましい関係性を築くための鍵がある。書くことのデイスアビリティを乗り越えるために選ばれるた口述筆記という方法は、それを確かめるための重要な方法として位置づけられるのである。

注

- (1) インゲ・シュテファン『才女の運命——男たちの名声の陰で』原著一九八九年、松永美穂訳、フィルムアート社、二〇二〇年。
- (2) 松永美穂「訳者あとがき」、前掲『才女の運命——男たちの名声の陰で』、二七七—二七八頁。
- (3) 前掲『才女の運命——男たちの名声の陰で』、五頁。
- (4) 前掲『才女の運命——男たちの名声の陰で』、二四頁。
- (5) 前掲『才女の運命——男たちの名声の陰で』、五三頁。
- (6) 秋山洋子「対幻想のかけで——高橋たか子・矢川澄子・冥王まさ子の六〇年代」、栗原幸夫責任編集『大転換期——「六〇年代」の光芒』インパ

- クト出版会、二〇〇三年、一三四—一五一頁。
- (7) 前掲「対幻想のかけで——高橋たか子・矢川澄子・冥王まさ子の六〇年代」、一三八—一四〇頁。
- (8) 秋山の論では言及されていないが、夫の原稿の清書を引き受けた女性として思い浮かぶ人物に島尾ミホがいる。島尾ミホと島尾敏雄の間の「書くこと」と「書かれること」をめぐる錯綜した関係については、梯久美子『狂うひと——「死の棘」の妻・島尾ミホ』（新潮社、二〇一六年）や宮地尚子「島尾ミホと敏雄——生き延びるということ」（『トラウマにふれる——心的外傷の身体論的転回』金剛出版、二〇二〇年、一七七—一八四頁）を参照されたい。
- (9) 前掲「対幻想のかけで——高橋たか子・矢川澄子・冥王まさ子の六〇年代」、一四〇頁。
- (10) 百合子は深沢七郎との対談（『文藝』一九七六年二月）のなかで、泰淳が脳血栓を患う以前から、「推薦文のような短いものは口述でしていた」ことを明かしている。また泰淳が病で倒れる以前から、百合子は出版社との仲介や原稿の送付などの秘書業務を担っており、部分的に口述筆記を取り入れていたことも『富士日記』の記述から確認できる。しかし、小説の口述筆記は一九七四年の夏、「海」に掲載された『目まいのする散歩』の原稿が初めてであり、執筆形態を本格的に口述筆記に切り替えたのは病後と見てよい。対談の引用は、深沢七郎（作家）×武田百合子「武田泰淳の存在」（武田百合子『武田百合子対談集』中央公論新社、二〇一九年、二二頁）に拠る。
- (11) 武田（旧姓・鈴木）百合子の略歴については、鈴木修編「武田百合子略年譜」（武田百合子『日雑記』中央公論社、一九九五年、二二三—二四一頁）に詳しい。百合子は一九四六年頃、神田の出版社昭森社に勤務するとともに、社主・森谷均の経営する階下の喫茶店兼酒場「ランボオ」での勤務を掛け持ちしており、武田泰淳ともこのランボオで知り合っている（鈴木修「姉・百合子の素顔」、『KWADDE 夢ムック 文藝別冊 総特集・武田百合子』河出書房新社、二〇一四年、九三頁）。
- (12) 梶尾文武「散文の同伴者——武田泰淳後期作品のための覚書」、『ユリイカ』第四五巻第一四号（通巻六三五号）、青土社、二〇一三年一〇月、二二—四頁。
- (13) 樋口寛「武田泰淳と武田百合子夫婦の「二人三脚」、山下悦子編「女と男の時空——日本女性史再考（全二三巻）⑫ 溶解する女と男——現代④」藤原書店、二〇〇一年、II頁。
- (14) その具体的な実態については、ジョアナ・ラス『テクスチュアル・ハラスメント』（原著一九八三年、小谷真理編訳、インスクリプト、二〇〇一年）に詳しい。
- (15) たとえば、森嶋外と森しげをケース・スタディに作家夫婦におけるテクスチュアル・ハラスメントの構図を実証したものと、藤木直実「作家の妻が書くとき——森しげをめぐるテクスチュアル・ハラスメントの構図」（『日本文学』第五四巻第一号、日本文学協会、二〇〇五年一月、二五—三七頁）がある。
- (16) 村松友視「百合子さんの眸」、中央公論新社編『富士日記を読む』中央公論新社、二〇一九年、一〇二頁。
- (17) 埴谷雄高は、『目まいのする散歩』が第二十九回野間文芸賞を受賞した際のスピーチで、大岡信が『富士日記』の文芸時評で、百合子の文章力は泰淳の口述筆記をする過程で会得されたものと述べていることに、次のように反論している。「百合子さんは口述筆記中にそれを会得したのではなく、百合子さん自身、生来の芸術家なのであります。〔…〕ですから、武田君はそういう百合子さんを発見し、驚き、感嘆して惚れ込んだのであります」（武田泰淳と百合子夫人——『目まいのする散歩』野間賞受賞式における挨拶、「戦後の先行者たち——同時代追悼文集」影書房、一九八四年）。
- (18) 一九六四年の晩春あたりから、東京の自宅と富士の山荘を往復する暮ら

しが始まった。『富士日記』には一九六四年七月から、途中中断を含みつつ一九七六年九月の間に綴られた日記が収められている。日記をつけるきっかけは、百合子が泰淳から日記帳を渡され、山にいる間だけでも生活の記録をつけるように促されたことだったと言う。当時のやり取りを、百合子は次のように述懐している。「山小屋が建ったとき、もらいものの日記帳を私の前に置いて夫は言った。「百合子にこれをやるからな。日記をつけてみろ。山にいる間だけでいいから。俺もつけるから。代る代るつけような? それならつけるか?」私が首を振ると、「どんな風につけてもいい。何も書くことがなかったら、その日に買ったものと天気だけでもいい。面白かったことやしたことがあつたら書けばいい。日記の中で述懐や反省はしなくてもいい。反省の似合わない女なんだから。反省するときや、必ずするいいことを考えているんだから。百合子が俺にしゃべったり、よくひとりごといつてるだろ。あんな調子でいいんだ。自分が書き易いやり方で書けばいいんだ」と、重ねて言った」(武田百合子「絵葉書のように」、週刊朝日編『私の文章修業』朝日新聞社、一九八四年、六三―六四頁)。

- (19) 日記発表の経緯については、百合子自身が『富士日記(下)』(中央公論社、一九七七年)の「あとがき」で「昨五十一年十月、「海」編集部の植嘉彦さんから、富士の山小屋にいるときにつけていた日記の一部を出したらどうか、とのお話がありました。ずい分ためらいましたが、供養の心持で、死ぬ年の夏の日記を「海」五十一年十二月号に(今年の夏)と題してのせて頂きました」(…)それから毎月、三十九年夏からつけはじめていた日記を「海」にのせて頂くことになりました。思いもかけないことでした」と回顧している。ただし、引用は武田百合子『富士日記(下)』中央公論社、一九九四年、三七七頁に拠る。

- (20) 植谷雄高「武田百合子『富士日記』帯文(上巻)」。ただし、引用は前掲『富士日記を読む』、一四〇頁に拠る。

- (21) 島尾敏雄「武田百合子『富士日記』帯文(上巻)」。ただし、引用は前掲

『富士日記を読む』、一四一―一四二頁に拠る。

- (22) 中村稔「武田百合子さんの文章」、武田百合子『富士日記(中)』中央公論社、一九九四年、四〇―四一頁。

- (23) 金井美恵子「犬の眼の人」、『重箱のすみ』講談社、一九九八年、四五頁。

- (24) 百合子の文章が単に彼女の才能やセンスだけで作り上げられたものではなく、徹底した彫琢の賜物であったことは、「百合子さんは、自分の文章を人一倍の執着心で推敲するタイプ」だとする村松の証言(『百合子さんは何色——武田百合子への旅』ちくま文庫、一九九七年、一六五頁)や、「母は雑誌等に書いた随筆を本にする際は、必ず細かく手を入れておりました。そうしなければ本にまとめたくないと、日頃、私にも言っていたからです」という武田花の回想(「編者あとがき」、武田百合子著、武田花編『あの頃——単行本未収録エッセイ集』中央公論新社、二〇一七年、五〇九頁)からもうかがえる。

- (25) 植谷雄高の「百合子さんの文章はまさに昭和文学のはしに建てられた不思議な奥深い宝庫である」(武田百合子さんのこと、武田百合子『ことばの食卓』中央公論社、一九九五年、一九七頁)という評言は、彼女の評価が文学場の周縁においてなされたことを如実に示している。

- (26) 本稿で『富士日記』に綴られた夫婦のやり取りを詳細に分析することはできないが、一例として一九七〇年四月二九日の日記を一部引用しておく。「夜、主人は色硝子のところに切り紙絵を貼るといいだし、切り紙絵の凶案を描く。「百合子、切れ」「とうちゃんば震えつ手だからチャチャクチャに切るからね」。私が切りぬく。主人の指図通りの場所(今日のは赤い色硝子のところ)に、梯子をかけて貼る」(『富士日記(下)』中央公論社、一九九四年、一二七頁)。

- (27) 西川祐子『日記をつづるとのこと——国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館、二〇〇九年。

- (28) 村松友視は前掲『百合子さんは何色——武田百合子への旅』のなかで、

- 「百合子さんは夫を天国へ送ってしまったまで、武田泰淳夫人を完璧に演じお
おせた」（二二二頁）、「武田泰淳氏の生前は自分の存在を『妻』という立場
に隠し込み、夫の文学への影響など微塵もない妻を、世間に向つては演じ
つづけていた」（二二二頁）と、百合子の演技性を繰り返し指摘している。
村松の言葉は、泰淳の生前から百合子の才はその片鱗を示していたもの
の、泰淳の側では彼女がそれをひた隠しにしていたということを強調する
ために用いられている。したがって、本論の文脈とはその言葉が意味する
射程は異なるのだが、広く共有された百合子のイメージを彼女の実像へと
短絡させないためにも、その演技性に注目しておくことは重要だと考える。
- (29) 中尾香「甘える男性像——戦後『婦人公論』にあらわれた男性像」、『社
会学評論』第五四巻第一号、日本社会学会、二〇〇三年、六四―八一頁。
- (30) 埴谷雄高の「暗黒の底もないニヒリズムのなかにいた武田泰淳が、生来
の無垢の《全肯定者》百合子さんの無垢空間に全二十四時間浸蝕され、つ
いには百合子さんの《全的肯定教》の信者第一号となつた」（『武田百合子
さんのこと』、『中央公論文芸特集』一九九三年秋季号）という評価は、そ
の最たるものだと言えるだろう。なお引用は、前掲『ことばの食卓』
（一六二頁）に拠る。
- (31) 河村彩は、「出会つた頃の百合子と泰淳の関係は決して心安らぐものでは
なかつた」と指摘し、二人の関係は最初から安定を保っていたわけではな
く、日々の生活を共にするなかで少しずつ積み上げられたものだと推察し
ている（『いまここの原風景——『犬が星見た ロシア旅行』を読む』、前掲
『ユリイカ』、二一九―二三〇頁）。本稿では深く立ち入らないが、百合子が
結婚前に泰淳の子どもを複数回墮胎していることも、こうした問題を考え
るにあたって見逃せない事実だと思われる。
- (32) 編集者・翻訳者・装丁家など作家を取り巻く人的ネットワークや、テク
ストの生産・流通・受容を支える出版システムの具体相を検証する研究の
なかでも、とりわけ作家と編集者の関係に着目し、草稿研究の立場から作
品成立の過程に迫つたものとして、石橋正孝『驚異の旅』または出版をめ
ぐる冒険——ジュール・ヴェルヌとピエール・ジュール・エツツェル』（左
右社、二〇一三年）が挙げられる。
- (33) ケアの思想は、近代市民社会において標準化されている自律的な主体で
はなく、人間の脆弱性や相互に依存し合う関係性を前提とするものである。
近年のケア研究は、自律的な主体モデルを理想化する新自由主義の台頭を
受けて、障害者や高齢者などの脆弱な主体と、そのケア役割を担ってきた
（主に）女性たちを周縁化しない新たな社会構想を模索する試みとして展開
されている。そこでは、社会の構成員から排除されてきた障害者や高齢者
など社会的弱者のニーズが重視されるとともに、そのニーズに応答する責
任を、これまでケアの担い手と見なされてきた女性たちだけが引き受ける
のではなく、社会全体で適切に配分することが目指される。主な成果とし
て、フアビエンス・ブルジュール『ケアの倫理——ネオリベリズムへの
反論』（原著二〇一一年、原山哲・山下りえ子訳、白水社、二〇一四年）、
ジョアン・C・トロント『ケアするのは誰か？——新しい民主主義のかた
ちへ』（原著二〇一五年、岡野八代訳、白澤社、二〇二〇年）、ケア・コ
レクティブ『ケア宣言——相互依存の政治へ』（原著二〇二〇年、岡野八代・
富岡薫・武田宏子訳、大月書店、二〇二二年）などが挙げられる。
- (34) 文学研究の領域でケアの問題を扱つた主な成果としては、米村みゆき・
佐々木亜紀子編『介護小説』の風景——高齢社会と文学（増補版）（森話
社、二〇一五年）や佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編『ケアを描
く——育児と介護の現代小説』（七月社、二〇一九年）を参照されたい。
- (35) 初出は『海』一九七四年九月号―一九七五年四月号。なお、本作の引用
は武田泰淳『目まいのする散歩』（中央公論社、一九七六年）に拠る。
- (36) 小嶋知善『武田泰淳『目まいのする散歩』論——小説の方法としての口
述筆記』、『目白学園女子短期大学研究紀要』第三四号、目白学園女子短期
大学、一九九七年二月、三〇九頁。

(37) 樋口覚「口述筆記の文学」、『新潮』第九一卷第二二号、新潮社、一九九四年一月、一七一頁。

(38) 他にも「貯金のある散歩」の章では、「文部大臣だけは私のものだと安心していられない。するするすると口述筆記をするのも女房だから、すでに危くなつてきている。せめて総理だけは、とねがつているが、それらの諸大臣に彼女を任命する権力の手綱を、はたして私は握っているのかどうか。〔…〕「百合子得意の巻だな」という総理の述懐も、そつくり、するすると口述筆記され、この散歩シリーズの原稿になつていっているわけである」(八四頁)と、家庭内での夫婦の役割を内閣に喩えながら、本作が口述筆記によつて執筆されていることがユーモアを交えて明かされている。

(39) 前掲「武田泰淳の存在」(深沢七郎(作家)×武田百合子)、二二二頁。

(40) 前掲「武田泰淳の存在」(深沢七郎(作家)×武田百合子)、二二五頁。

(41) 武田泰淳「丈夫な女房はありがたい」、『朝日新聞』一九六四年二月二〇日。

(42) 後藤明生「散文の自由——武田泰淳『目まいのする散歩』」、『復習の時代』福武書店、一九八三年、六七頁。初出は『海』中央公論社、一九七六年九月号。

(43) 前掲「散文の自由——武田泰淳『目まいのする散歩』」、六七頁。

(44) 後藤明生「解説」、『目まいのする散歩』中公文庫、一九七八年、二〇六頁。

(45) レベッカ・ソルニット『ウォークス——歩くこと的神秘史』原著二〇〇〇年、東辻賢治郎訳、左右社、二〇一七年、三八—三九頁。

(46) ちなみに『武田泰淳全集』(筑摩書房、一九七一年六月—一九八〇年三月)では、本作は「小説」の部に収録されている。

(47) 國分功一郎『中動態の世界——意志と責任の考古学』医学書院、二〇一七年。

(48) 冒頭の散歩の場面では、目まいを抱える「私」にとつて散歩が決して自動化された行為ではなく、「歩こう」という意志が身体によつて遮られ、実

現されないことが度々繰り返される様子が記されていた。『中動態の世界』でも、歩くという基本的な能動態と思われる行為ですら、その行為を細分化して捉えてみると、実に多くの内的・外的条件が満たされている必要があり、それはまさしく「私のもとで歩行が実現されている」(二〇頁)と説明すべき事象であることが指摘されている。

(49) 前掲『中動態の世界——意志と責任の考古学』、二九三頁。

(50) 『目まいのする散歩』と百合子の日記との影響関係や、その表現の差異について論じたものに、前掲「散文の同伴者——武田泰淳後期作品のための覚書」や石橋正孝「武田百合子における旅とエクリチュール」(『立教大学観光学部紀要』第一八号、立教大学観光学部、二〇一六年三月、九九—一一三頁)がある。本稿では細部の表現の異同に触れる余裕はないが、日記を引用することによる語りの変化に、受動でもなく、能動とも言い切れない書く行為の特徴を読み取り、それが口述筆記という方法とどのような交差しているのかを中心に論じる。

(51) 武田百合子「あとがき」、『犬が星見た——ロシア旅行』中央公論社、一九九四年、三四二頁。

(52) 前掲「武田百合子における旅とエクリチュール」、一〇二頁。

(53) 前掲『犬が星見た——ロシア旅行』、一一頁。

(54) 「私は上段のベッドによじのぼり、一人だけ先に寝てしまった。私のいびきは下の連中に聞えていた。女房と親友は、下のベッドに腰をおろし、窓の外を見ていた。案内掛のYさん(彼も私と同様、上のベッド)が、ぶどう酒の仲間入りをする。女房のベッドの小型のランプが点灯ないので、Yさんは、その由を車掌に告げた。やがて小柄な老人車掌が来た。彼は「電球はあるが、汽車が走っているうちは駄目で、ハバロフスクへ着かなければ直せない」と言った。赤いセーターを着た老人車掌は話し好きで、そのまま車室の入口に寄りかかり、話しはじめた。「あなたのセーターはきれいで赤色が素晴らしい。よく似合います」と、女房はYさんに言ってもらう。

- 大へん無邪気な老人だと、彼女は思った」（前掲『目まいのする散歩』、二二九頁）。当該箇所は、前掲『犬が星見た——ロシア旅行』の二八一—三二頁にあたる。
- (55) 初出は「支那で考えたこと」（『中国文学』第六四号、一九四〇年八月）のちに、評論集『わが中国抄』（普通社、一九六三年）に収録された。
- (56) 前掲「絵葉書のように」、六二頁。
- (57) 百合子が泰淳との「へだたり」を吐露している文章はこれだけではない。百合子は一九五〇年代前半の泰淳との暮らしを回想するなかで「あの頃はボールペンなどなく、武田はGペンにインクをつけて、ひつかくように原稿を書いていました。昆虫の肢みたいにはね上る癖の字体で。あの頃は部屋数も少なく、武田が仕事をしているすぐそばにふとんを敷いて私は寝ていました。夜中に眼がさめて、ペンのきしむ音をじつと聞いていると、武田が千里の彼方に遠ざかって行く気がしました」と述懐している（著者に代わって読者へ「あの頃」、武田泰淳『風媒花』講談社文芸文庫、一九八九年、三一七—三一八頁）。
- (58) 前掲『犬が星見た——ロシア旅行』、一五一頁。
- (59) 梶尾文武は、「百合子は彼（武田泰淳——引用者注）への応答として『動物』であることを引き受けた」と述べ、小説『風媒花』（一九五二年）のなかで、主人公・峯が、妻である蜜枝から鼠のごとく「チョロちゃん」と呼ばれていたこととの関連性も視野に入れつつ、「夫は妻へ、妻は夫への応答として、『動物』もしくは「神」であることを引き受ける」と指摘している（前掲『散文の同伴者——武田泰淳後期作品のための覚書』、二三四頁）。
- (60) 武田百合子「あとがき」、前掲『犬が星見た——ロシア旅行』、三四二—三四三頁。
- (61) 四方田大彦『犬たちの肖像』集英社、二〇一五年、八二頁。
- (62) ダナ・ハラウェイ『伴侶種宣言——犬と人との「重要な他者性」』原著二〇〇三年、永野文香訳、以文社、二〇一三年。訳者の永野文香は、「重要な他者性」という用語について「*significant other*」とは文字通り「重要な他者」であり、特に「大切な人、恋人、配偶者」を指す。したがって、「重要な他者性」というハラウェイの鍵概念には「重要な他者性」と「著しい—他者性」、すなわち、かけがえないパートナーであることと、それにもかかわらず互いに無視できない他者性を有していることという、二重の意味が仕掛けられている」（七頁）と指摘している。
- (63) 前掲『伴侶種宣言——犬と人との「重要な他者性」』、七八頁。
- (64) 前掲『伴侶種宣言——犬と人との「重要な他者性」』、六頁。
- (65) スナウラ・テイラーは、障害者と動物の解放が、健常者中心主義や依存的な身体を否定する社会的価値観への抵抗という文脈において同じ問題の根を有していると指摘し、両者の運動と理論を交差させた議論を展開している。障害者と動物の依存的な交わりに目を向けるテイラーの以下の文章は、中途障害を負った泰淳と、「犬」という呼びかけを引き受けた百合子の互助的な関係性はどこか共鳴するように感じられる。「けれども大部分、不具で、依存的で、効率が悪く、無能な人間が、効率が悪くて依存的な不具の犬を支え、また同時に、支えられているということには、ある意味適切で、実のところ、うつくしい何かがある——傷つきやすく、種を異にした二匹の相互依存的な存在が、相手に必要なものが何なのかを理解しようと手さぐりしている姿には、ぎこちなく、そして不完全に、わたしたちは、互いに互いの、世話をみる」（『荷を引く獣たち——動物の解放と障害者の解放』原著二〇一七年、今津有梨訳、洛北出版、二〇二〇年、三七〇頁）。
- (66) ケアの倫理を重視するフェミニズムの視点から、政治社会のあり方を問いつつ議論については、岡野八代『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、二〇一二年）を参照されたい。
- (67) 前掲「絵葉書のように」、六四頁。
- (68) 前掲『犬が星見た——ロシア旅行』、三四二頁。
- (69) 前掲『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』、三六

一三七頁。

(70) 武藤桂は、「泰淳が百合子に『富士日記』を書かせることに成功したのは、泰淳の作家活動に役立つことを百合子があつさり感知していたからではないだろうか。『武田の勧め方がうまかつた』からだけではなく、むしろ、百合子が泰淳の要請に積極的に応え、書き続けたのではないだろうか」との仮説を提示している（『武田百合子』『富士日記』『犬が星見た』の性格、『群馬県立女子大学国文学研究』第二十二号、群馬県立女子大学国語国文学会、二〇〇二年三月、一四七頁）。

付記

本論文は、J S P S 科 研 費 (21K20203) による研究成果の一部である。